

猿新聞

編集責任者
山村 準

tel: 0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：220部
つつじが丘：430部

【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：30部

獣害を振り返る

近年起きてくる獣害は、新しい問題であると考えられがちですが、獣害は太古の昔からあり、苦闘の歴史が今に伝わっています。長い歴史の中で野生動物が少なく、獣害がなかったのは、明治から昭和にかけてのほんの100年間程。今後獣害対策を進めていくには、野生動物と人間の関係を歴史的にも、ちゃんと押さえておかないと肝心の対策を誤りかねません。そこで、現在抱えている獣害問題解決の一助となることを目指し獣害の歴史を振り返りたいと思います。

江戸時代前期、17世紀初めから18世紀初めにかけて日本の人口は約2倍に増加。それに伴い耕作地の拡大が進み、その結果シカやイノシシなどの野生動物と農民との軋轢は著しく高まり、江戸の中期には農作物を守るためのシシ垣が全国各地で建設されています。しかし、文献によると鎌倉時代（1192）

1333）すでにシシ垣は存在し、その歴史は鎌倉時代に遡ることが出来ます。

野生鳥獣による農業被害は食糧生産上の重要な課題で、駆除としての狩猟は早くから行われていました。五代将軍綱吉による生類憐みの令の時代ですら、野生鳥獣の駆除は普通に実施されていました。同じく綱吉の時代、武士より農民のほうが多くの鉄砲を持っていたそう、その理由は獣害対策であったといわれています。

江戸時代後期は、大規模な狩猟が盛んに行われたという記録が各地に残っています。その時期、狩猟奨励の報奨金制度が導入されて、それによると、「正月から9日までの間に、『3年子』以上のイノシシを捕らえると、1頭当たり銀15匁（約2万5千円）、『2年子』なら銀5匁（約8千円）、『1年子』なら銀2匁（約3000円）を褒美とし

て与えるとしていた。シカについては、年齢にかかわらず1頭当たり銀5匁としている。今で言う有害駆除報奨金です。

明治に入り、狩猟によるシカの減少が懸念されたことから、政府は1892年に狩猟規則を制定。以降シカは、狩猟制限と解禁を繰り返す政策を繰り返して、絶滅を避ける措置がとられ現在に至っています。1905年オオカミの絶滅が確認されました。しかし、面白いことに、この頃から山間部の獣害は減少し始めるのです。

人口増加による平野部の開発や狩猟の普及で、猟銃の解禁や高性能の銃が導入され野生鳥獣の乱獲が始まりました。明治年間を通じて野生鳥獣は激減し、多くの種が絶滅したり地域的な絶滅が起こっています。

原因として考えられるのは、やはり明治以降は幕府の禁制が解かれ、高性能の銃が導入されて駆除が進んだこととです。また、それに伴い食肉としてもシカ

やイノシシが狙われ始めた。江戸時代も肉食はこっそりと行われていたが、明治に入ってから奨励されるほどになっただけで、そのほか骨や角なども資源として使われるようになっていきます。

1880年代（明治13年）には軍用の毛皮を調達する制度がつくられ毛皮市場も形成され、国の主導で狩猟者の組織化が進み猟友会が結成されたのもこの頃です。

大正時代には、明治期の乱獲を踏まえ、狩猟規制の必要性が認識され地域的な捕獲禁止など、鳥獣保護関連の法整備が整えられた時代です。

1900～2000年は野生動物が最も少なかった時代で、獣害の無かった100年と言われています。しかし、昭和に入り、1950（昭和25）年頃、戦後復興のための、木材需要が急増。このため、政府は造林を急速に進めるため、天然林を伐採し、針葉樹中心の人工林に置き換える拡大造林政策を行いました。これに伴う天

然林の伐採で出来た草地は、牧場的環境となりシカを始め野生動物が激増しています。環境省の実施する自然環境保全基礎調査の大型哺乳類調査から、調査の実施された1978年と2003年の25年間のシカの分布域変化を見ると、その間で70%以上も拡大していることが確認されました。それから10年以上も年・月が経っていますから、その分布は、個体数の増加を伴いながら、もつと拡大していると考えられます。

（左上图参照）大正・昭和・平成年代は鳥獣保護関連の法整備や自然保護思想の高まった時代。保護政策の効果により、1990年代からシカ生息数が増え始め、広く農村集落に出没し被害が深刻化し始めたのは30～40年前からです。我が国の鳥獣行政は重大な転換期を迎えています。従来の「鳥獣の保護」を基本とする施策から、一部の鳥獣については、積極的に捕獲を行い、生息状況を適正な状態に誘導する、鳥獣管理のための施策への転換を図るとして、環境省と農

林水産省は、平成25年12月、「抜本的な鳥獣捕獲強化対策」としてニホンジカ、イノシシの個体数を10年後（令和5年度）までに半減するといった目標を掲げています。令和年代は、温暖化の影響が顕在化する年代と言われていると見られます。温暖化が進むと、野生動物の生息・生育適地が、移動したり消滅したりします。既にシカやイノシ

シカによる交通事故

我が国で獣害が大きな問題の一つに取り上げられるようになったのは、1990年代に入ってからです。

当時獣害とは、一般的に農・林・水産業被害を指していましたが、近年では野生動物による人身事故や生活環境被害・鉄道事故・交通事故などが多発している社会問題化しています。

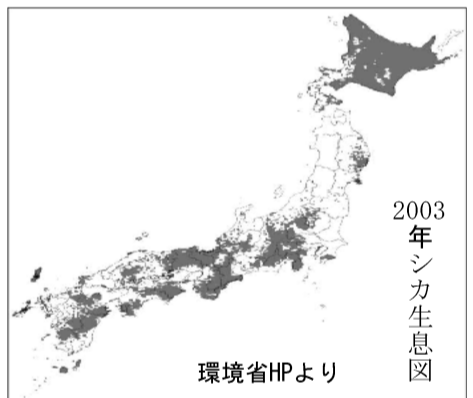
シカの交通事故は北海道が最も多く道東に集中しています。時期的には、繁殖期の10月頃と越冬地からの分散期にあたる3～4月に多いと言われています。

秋～冬は山間部での鳥獣の餌が少なくなる季節。その時期に、道路・線路脇や田畑に緑草が生えていると、その緑草にシカが集中し交通事故や鉄道事故の原因になります。

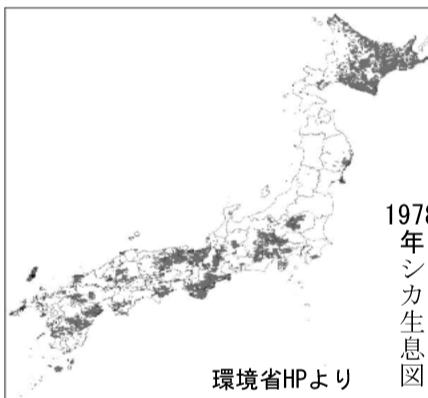
以下次号に続く
野生鳥獣による交通事故・人身事故は増加傾向にあります。皆様方の、ご意見・体験談など、お聞かせいただければありがたいです。

冬場は凍結防止剤や融雪剤が事故の原因に繋がっているとも言われています。凍結防止剤や融雪剤には、塩化ナトリウムや塩化カルシウム（塩）が含まれているからシカが舐めているからシカが滑って来ると言われています。シカと列車の衝突事故も増加しています。

全国で、年間約5000件ものシカと列車の衝突事故が起きていて、鉄道会社は遅延や死骸処理など大きな損失を出しています。その原因は、シカが鉄分やマグネシウムを補給するために線路内に侵入するからだと言われています。



2003年シカ生息図 環境省HPより



1978年シカ生息図 環境省HPより



レールを舐めるシカ 産経ニュースより



融雪剤を舐めるシカ 洪崎建設株式会社hpより

名張A群の現状

名張市農林資源室

受信音が拾えない

○経緯

○発信器装着個体情報
 個体番号：A3
 発信器周波数：142,9800LSB
 チャンネル番号：5
 デコーダID：1602
 推定年齢：8歳
 性別：メス
 捕獲場所：上比奈知

○現在の状況

現在、名張A群に装着している発信機は上記の個体番号A3のみであり、令和2年10月頃から電波が発信されなくなっている。原因は発信機の電池切れだとみられる。

新しい発信機を装着するため、以前から仕掛けていた檻に加えて、青蓮寺にも檻を設置し、

○サル群の行動域調査は昨年度の群れの動きを元に実施をしており、9、10月中は特に昨年度と同じような群れの動きであったため、ほぼ毎回の調査で目視により確認することができていた。昨年度の動き方を参考にピンポイントで群れに接近することができていたため、発信音の微妙な強弱に気がつくにくかった。また、音が小さくなっているから聞こえなくなる

○サルの捕獲と発信機の装着
 上記個体番号A3に発信機を装着した後も捕獲は継続して実施しており、2年間で10頭を捕獲した。しかし、オトナのメス個体が捕獲されないため、発信機の装着に至っていない。オトナのメス個体には理由としては、サル群を構成しているのはメスであり、群の行動域を調査するためにはメスに装着する必要があること、コドモやワカモノに装着すると成長に伴い体が大きくなるにつれて、首輪型発信機によって首が締められ、その個体を殺しかねないためである。

○サルの位置情報は、サル対策上不可欠です。名張市農林資源室は、A群エリア住民にサルの位置情報の提供を呼びかけています。ご協力のほど宜しくお願いいたします。

最近の名張A群

仙頭 賢さん
 サルの位置情報は、サル対策上不可欠です。名張市農林資源室は、A群エリア住民にサルの位置情報の提供を呼びかけています。ご協力のほど宜しくお願いいたします。

年末に当たり
 猿新聞は創刊以来一七四号を迎えました。至らぬ点は多々あったと存じますが、今後とも皆様方のご期待に添えるよう全力で取り組んでまいりますので、今後とも何卒よろしくお願いたします。

仙頭 賢さん

○サルの位置情報は、サル対策上不可欠です。名張市農林資源室は、A群エリア住民にサルの位置情報の提供を呼びかけています。ご協力のほど宜しくお願いいたします。

○サルの位置情報は、サル対策上不可欠です。名張市農林資源室は、A群エリア住民にサルの位置情報の提供を呼びかけています。ご協力のほど宜しくお願いいたします。

サル出没状況

11月11日、つつじが丘南では子どもが足をかまれるという人身事故が発生して、登下校時のサル対策が問題になっています。また、すずらん台小学校ではスクールゾーンに多くのサルが出没し保護者や学校関係者が心配しています。青山群が名張A群エリアに合流か？、との

情報はあります。これを受け、「三重県伊賀農林事務所伊賀地域改良普及センター」と「名張市農林資源室」が、A群の現状と今後の対策についてのフォーラムを、来る11月28日（土）滝之原市民センターで開催予定です。（本文2面の「最近の名張A群」参照）

大量捕獲前までに戻りつつあります。赤目滝や長坂周辺にまで来ていますので、上三谷・矢川・ノノ井・星川に出没するのは時間の問題です。今後のサル情報には十分留意され、万全の対策を取られることを願っています。

情報確認不能日
 10月24日
 11月6・7・8・12・13・14・17日



チヨット一服

農家と非農家の意識の疎通

日本は森林資源が豊富な国。戦後の拡大造林により植林した木が今や伐採の適期を迎えています。廉価な輸入材に押され国産材の需要は落ち込むなか、林業従事者の減少などが重なり日本林業は衰退し森林は荒廃の一途をたどっています。森林の荒廃に伴い、生態系のバランスが崩れ、野生動物の餌となる植物が減少し、野生動物が餌を求めて荒廃した山から人里へ出没し、獣害の深刻化の原因に繋がっています。

私たちが住む名張市は、少し歩けば季節を感じる田畑や山林が広がり、四季折々が実感できる地域です。しかし、農業に関しては農家・非農家間で温度差の感じられる地域でもあります。この美しい風景と地域の農業を守り育てるには、農家・非農家を問わず集落住民みんなが話し合い

目指す農業の姿をみんなで描き、その実現に取り組むことが重要になります。また、農家・非農家の関係は、「お手伝いできたらいいな」「お手伝いが欲しいな」という手を携えられる関係作りが重要なことです。これからの農業は、農家・非農家が一緒に考え一緒に行動する時代です。

農道を歩けば畑に設置された柵が、所々で野生獣に荒らされた痕跡が見られます。農家の日々の管理体制もありますが、兼業農家の多い地域では日々の見回りは出来ずに見過ごされている事が多々あります。これら野生獣による侵入防護柵の被害などを農家に「柵壊れてますよ！」と知らせるなど非農家と農家との意識の疎通を図ることも重要なことで、獣害対策に対する連帯意識の向上につながっていく最初の一歩ではないかと考えます。

文・畠山 ひさ子

この夏頃より、すずらん台小学校の農園でのサル被害や、滝の原集落での畑の被害が続出しています。今、青山群の調査をしているところですが、青山群が分裂して発信器付き5頭を残し、他20頭が、すずらん台周辺に来るようになってきたと考えられています。今後の対策の一つとして滝之原地区・すずらん台で発信器を付けるサルを捕獲しておく必要があります。

今、青山群の調査をしているところですが、青山群が分裂して発信器付き5頭を残し、他20頭が、すずらん台周辺に来るようになってきたと考えられています。今後の対策の一つとして滝之原地区・すずらん台で発信器を付けるサルを捕獲しておく必要があります。

